

2026 (令和 8) 年度

---

---

小 論 文

---

---

10 : 00 ~ 11 : 30

文 学 部

国 文 学 科

学校推薦型選抜(一般)

注 意 事 項

1. 開始の合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 合図があつてから受験番号を小論文解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
3. この冊子は4ページあります。
4. 印刷の不鮮明な箇所や、汚れの箇所があつた場合は、すみやかに申し出なさい。
5. 小論文解答用紙は2枚配付しますが、提出するのは1枚だけです。残りの1枚は下書き用です。
6. 小論文は縦書きで書きなさい。
7. 冊子と下書きに用いた解答用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

世の中に物語といふもののあるなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居よひあなどに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしきまされど、わが思ふまに、そらにいかでおぼえ語らむ。

十三歳の少女が都からはるかな東国上総の国司の館で源氏物語を初めて知ったのは、姉・継母がおぼつかない記憶をたどりつつ、語り聞かせてくれた断片的な場面場面からだった。

更級日記作者の父菅原孝標たかすゑが上総の国司となったのは、一〇一〇年ごろと推定されている源氏物語の成立からわずか七年後であった。姉や継母はその物語のいくつかの巻を目にしたことがあつたかもしれないが、その時わずか十歳に過ぎない少女は、物語を読むには幼すぎた。少女が物語への目覚めを体験したのは、「そらに」おぼえ語られた物語によつてである。

その物語の全貌を知りたいと、物語のあるはずの都に焦がれるような羨望を抱き、ついに上京を果たし、受領の北の方であつた叔母から贈られて、待望の源氏物語全巻を手にしたのは十四歳の時であつた。源氏物語ア耽読アの日々がそれから始まつた。自分の本を所有することはそれほど彼女にとつてかけがえのない喜びだつた。後に寢覚物語・浜松中納言物語・あさくら・みづからくゆるなどの物語を書いて、紫式部に次ぐ平安時代第二の物語作者となつたこの少女が、自分の定められた運命を思い知つた時だと言つてもよいだろう。

物語を手に入れるまでの道筋を語るこの日記の冒頭は、自分だけの物語を手にかかるといかに困難であるかを語りかけるものでもある。印刷・出版によつて同じ物を大量に複製できる時代ではなく、物語を所有するには、ボウダイイな量の紙と墨と筆、そして作者その人が費やしたとほぼ同等か、それをしのぐ作業量(原本と写本を比べ見つつ写す労力)が必要とされた。五十四帖分の紙と墨と筆、そしてそこに費やされたエネルギーを思うとき、源氏物語を写すとは源氏物語を書くことに劣らぬ情熱と時間

と労力をかけて、初めて達成されるものであることを了解する。

しかも、それは、大事な本の長期貸し出しにに応じてくれる鷹揚な持ち主がいて、という前提の上でのことである。そうでなければ、<sup>①</sup>とうていできない大事業であった。どんなに気を付けても、長い時間の間にはせつかく借り出した本に墨を付けたり、水をたらしたりすることも多かつたらう。原本に少しでも傷がつけば、信頼を失つて次の部分を借り出すのはほぼ絶望である。

<sup>②</sup>源氏物語を「写す」という行為は、そのまま源氏物語を「書く」にも等しい行為であって、著者の筆の墨接ぎ、抑揚とリズムをそのままに反復して生きることである。作者に依り憑き、作者になり代わつて物語を呼吸する行為なのである。そうして獲得された本文は、写し手にとって、何よりも私のための、私だけの「本」だっただらう。場合によつては、より「私好み」の本文にしているために、原文の言葉を書き換え、書き加えることも辞さなかつたと思われる。他者と共通するテキストを保有することが望まれるのではなく、差異性を持った「本」こそ、目指されていたのである。現存する平安・鎌倉時代の写本断片がいずれも、現行の本文のどれとも一致しないほど揺らぎを抱えているのは、だれもがそれぞれの写し手にとってのかけがえのない「本」、自分だけの「本」を作り上げるユウワクに抗しきれなかつたからであらう。

紫式部は同時代の人々にとつて、知り合いの奥さん、宮廷で見かけた女房、旧式の貧乏受領の娘、そのあたりにざらにいた一人の「女」に過ぎず、紫式部が書いたから値打ちがあると人格化され、紫式部のテキストがそれ自体「証本」として動かしがたい權威をまとうようになるのは、俊成・定家の活躍する院政期からである。

近現代において、源氏物語の現代語訳をした人々が、しばしば「紫式部」になつてしまい、「紫式部」になり代わつて発言・行動してきたように、物語の書写者たちはしばしば物語作者になり代わり、物語を生きようとする。現代語訳者たちと同じく、自分の「本」を所有すべく、全力を傾けたのである。そうやって物語を写し、独自の変貌と変容とともに物語を生きることこそ、平安の写し手たちがそのストイックな写字の営みの過程でひそかに育んだ「夢」であつたに違いない。

更級日記の作者のように、幸運にも源氏物語全巻を勞せず手に入れることができた者もいたが、それも上京後一年間にわたつて伝手を求め、縁故を頼つて探求させた末のことであつて、都にも憧れの源氏物語は<sup>エ</sup>払底していたとある。菅原道真以来の学者

の家として名高い作者の父方にも、蜻蛉日記の作者を伯母に持つ作者の母方にも、源氏物語を揃いで持つており、それを貸してくれるような鷹揚な人はなかなかいなかったのである。

あらゆる伝手を尋ねて得ることができなかった少女が、仏に祈り、参籠をくりかえしていたころ、受領の任期明けで地方から帰ってきた叔母が意外にも源氏物語の所有者で、作者にそれを丸ごとくれたという。当時の受領階級がいかに富裕であったか、都の貴族の間ではなく、地方にこそ余剰の富と知的資産がチクセキチクセキされていたことを知らせる興味深いエピソードである。この叔母が源氏物語を手放したのは、妻として、母としての仕事が忙しく、物語をのんびり読むような時間がなくなってしまったからだろうか。娘のいなかっただけで、妻として、母としての仕事がかわいがって、譲ってくれたものだという。

物語への飢えの時間が長かったせいもあるだろう、やがて少女のあらゆる時間は源氏物語を読むことに捧げられるようになる。

はしるはしる、わづかに見つつ、心も得ず、心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内うちにうちふして、ひきいでつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日暮らし、夜は目のさめたる限り、火を近くともして、これを見るよりはかの事なければ

桐壺巻から始まって、源氏物語の全五十四帖を、ほしのままに読み耽る生活が長く続き、繰り返し読んだあげく、しまいには諳そらんじるほどにまでなったというのだから、少女の生活はすべて「物語を生きる」ことに費やされていたといってもいいだろう。十四歳と言えば婿取りも可能な成人の年齢（女子の平均成人年齢は十二〜十五歳）である。源氏物語を読むことによつて大人となり、やがて物語作家の道を歩むことになる少女の、大人になるための、内なる力を撓ためているような「籠り」がここには描かれている。

（三田村雅子『記憶の中の源氏物語』による）

問一 傍線部ア～オについて、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは適切な漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「とうていできない大事業」とあるが、どういうことか。八〇字程度で説明しなさい。

問三 傍線部②「源氏物語を」写す」という行為について、筆者はどのように考えているか。一〇〇字程度で説明しなさい。

問四 波線部にある助動詞をすべて抜き出し、活用形と文法的意味を答えなさい。

問五 「物語を生きる」ということについて、あなたはどのように考えるか。本文を踏まえた上で具体的な例を挙げて、六〇〇字以内で書きなさい。